

7. 12 虫送り

「八幡の語り草」第 76 話 (68 頁)

八幡でも、五穀豊穡を祈って虫送りと言う行事が、江戸時代より昭和 34 年の伊勢湾台風の後ころまで続いて行われていた。

大字八幡十組が、七月二十日、土用の入りの日に、組長、中老、壮年会、青年会がそれぞれ提灯を持ち、村人は松火を持って集まった。

豊年祈願を行い、神酒をいただいてから一行は、荒井・堀之内・廻間組、中島・中小根・荒古組、西平井・上平井・杉山組に別れ、各地区を練り歩く。

黒廻間池の堤で点火された松火の火が、折からの黄昏の中を、多い時は、二百から三百と続き、その後を高張提灯、笛、太鼓が連なる。この景観は、杉山から眺めると全く素晴らしいものであった。こうした火の行列は、最後に供養場へ集結。ここで、区長の合図で全部の松火を消す。今までの明るさが一瞬にして闇となり、人の声のどよめきも静まり、辺りを静寂が包んだ。

この虫送りの行事を催すに当って、各組の順番とか、黒廻間池堤へ到着した順番とか、高張提灯の数などで部落権威を競うもめごとが発生したこともあった。